

第6分科会（美術教育）報告

美術教育を見つめて

今回の分科会参加者は七名、レポート四本であった。例年よりも少ない参加ではあったが、その分、論議に時間を割くことができレポートの内容からの議論や実践交流を深めることができた。

さて、研究課題として私たちは次のように提起し研究を継続している。

(1) 子どもたちを取り巻く様々な状況を明らかにし、美術教育によってどのような力を育ててゆくかを現場の実践を通して研究を深める。

(2) 子どもたちが楽しく主体的に制作や鑑賞を通して自己の感性を高め、作品づくりなどで達成感や心からの感動を味わうことができる教材や授業について研究する。

(3) 子どもたちの作品や鑑賞活動を通じ、美術が心身ともに健全な児童生徒を育成するために不可欠な科目であることを明らかにし、造形活動によって身につく学力を確かめられる研究を推進する。

レポートによる実践報告からは、それぞれの現場で抱える課題を明らかにし、解決に向けての奮闘の様子を垣間見ることができた。

〈レポートのまとめ〉

多度志保育園（深川市）

幼・小・中・高の学校種を問わず、実践が集うことができる美術分科会の、先頭をいつも最初に切ってくれるのは斎藤先生。もう退職して何年にもなる氏は、我々に毎年いつも勇気と啓示を与えてくれる言葉をくれる。お決まりの“たった数名による卒園制作のベニア板三枚もの木版画”を氏は、「私は、作品を持って来ているのではない。いつも“子ども達をこの場に連れて来ている”と思っている。」と言う。その言葉に奮い立ち、我々も毎年“子ども達をこの場に連れて来ている”のだ。他にも今年は、滋賀の大学で行われた全国的な子どもの作品展に“子ども達を連れて行った”時の収録と、幼稚園児の作品集も持って来てくれました。そこにも学ぶものが多いことに驚かされる。

「もしピラミッドが、あれほどまでに大きくなかったら、人々は感動するだろうか？ “大きさの質”ということもあるのです。」 思い出の情景を、紙で作

り並べることで、十歳以上でないとできないはずの「重なり」の遠近法」ができるのだ。お手製の園児向け彫刻刀に馬連と、選ばれた和紙。素材や道具作りへのこだわりも、園児の制作を保障する。素晴らしい実践を支えているのは、指導者のノウハウと熱意であることを痛感させられる。

園児達は、“本当の版画”（彼らは木版をそう呼ぶ）を制作しなければ、ここを卒業できないと思いついでいるのだ。来年・再来年には自分が…そんな先のことを考える幼児はいない。「伝統の力」まで味方につけてしまうほどの、確かな実践がそこにはあるのだ。

「鑑賞 10」 茶谷裕樹（美深町立仁宇布中学校）

「免許外ですが」と言いつつ、早十本目となる今回のレポートは、鑑賞授業の在り方を問う貴重な実践であった。「作者や時代背景に光をあて、作品を側面から見る鑑賞」という自らの授業スタイルを「旧式」と捉えることで課題を見出そうという試みだ。授業内に留まらず、山村に学ぶ子供達に美術館へ足を運ぶよう促した。新聞記事や展覧会のチラシ等を積極的に掲示するなどし、その結果、毎年一人は美術館へ足を運ぶようになった。また、本物に触れた生徒たちの「もっとうまく描きたい」という欲求を叶えようと、制作の授業にも様々な工夫を凝らした。一年生では遠近法を、二年生では質感の描き分けを、三年生では写真を使って客観的に自己を見つめさせる取り組みを行っている。こうした鑑賞から制作につながる一連のサイクルが生徒個々の美的感覚を育てている。

来年度末には新たに美術免許を取得予定ということもあり、今後の茶谷実践からますます目が離せない。

「原点回帰」 大崎智尋（札幌白陵高校）

ミクストメディアの手法による作品を一抱え背負って来てくれた。彼は生徒にこう切り出す。「人間だけでなく象やチンパンジーでも絵は描ける。しかし、彼らはそのままにしか描かない」「人間だけが、見たものを再構成して、自分というフィルターを通し表現する。それが誰かを感動させることができれば、それは芸術と呼ばれるべき作品だと思う」と。そして、「俺を感動させる作品を作れ」と言う。いつも生徒に真っ直ぐに向き合う“大崎節”がここでも炸裂する。

生徒は、初めての取組みに困惑しつつも試行錯誤の末、作品を完成させる。

そして、後期の二作目へと挑んで行く。今の子ども達にとって、“どうやって制作するか：HOW”よりも“何を制作するか：WHAT”の方が難しいようだ。そこをクリアさせるため、自分をどう耕させ、どう次の作品に臨ませるのか、来年の報告が楽しみである。

「Blues」 十河幸喜（江差高等学校）

今回もしゃべるレポートである。いつも通り檜山合研の報告をステップにジャンプしてくる。教科別の分科会は「表現と教育」と形を変え、音楽から理科の先生までが集う謎の場となってしまったものの、教科を越えて熱意ある実践や、「これくらいはできるだろう」という教材・教具の投げ与えからの反省と脱却なども振り返り、むしろ刺激的な場であったようだ。自分の教科にだけ凝り固まることの危険に着いても述べている。

生徒を取巻く現況を否定的に捉えたなら、スマートさを嫌い流れに逆らってひたすら漕ぎ続ける彼のスタイルは、ここでも健在である。初の立体のレポートでも、たまたま教材が山積みの状態で、なし崩し的なスタートになっても、それを好機と捉えて取り組ませる。最初は、集中し切れない者もいるが、やがて段々とはまっていく生徒達。彫る音だけが響く授業。板・印材・ケント紙・古い教科書等、「埃の山が宝の山」に変わる瞬間である。自らが進んで美を追求する背景を、教師がどの素材を提供し、どう作り寄り添っているかは大切である。昨今よく言われる「知識・技能・創造」の薄っぺらさに、彼の実践は警鐘を鳴らす。

「美術教育の普遍性と時代性」 上野秀実（釧路江南高校）

上野氏は今回も綿密に仕組まれた自画像の実践報告である。教室にライフマスクを置いておき、石膏像と比較させ、目指すものが「コピー」ではないことに気づかせる。「美とは生きている感じである。」というロダンの言葉を引用する。自己を内外から「リアル」に捉えて表現させる。「よく見て描く」ようにさせるために、スプーンに映った自画像に取り組ませる。

ポスターの制作では、目的を「表現技法」ではなく「表現内容」に絞込み、“スマホ”を使わせてチームで制作を行わせた。中には、思いがけないプロデュース力を発揮し、学級の生徒や先生にまで協力してもらい制作した作品まで登場する。

目的を達成するためには、携帯漬けの現状を憂うばかりでなく、逆手に取って表現手段にさせてしまう。時代の風をしなやかに柳のように受け流す。レポートの題「教育の普遍性と時代性」の名の通りに…。

ここ数年、書店での美術に関する書籍のコーナーが縮小されているケースが見受けられる。規模の小さい書店では元より美術関連の本が少ない場合が多かったが、札幌や東京へ進出した大型複合型書店でも地方によってはこの傾向が高まっているのではないか。道東の店舗でも美術書コーナーは設けられていたが札幌にある有名書店に比べると数十分の一程度しかない売場ではあったが新しく発行されたものは随時並べられており、時折そこで手に取ってみるのを楽しみに足を運んでいた。最近その面積が半分程度にまで減ってしまい道東最大規模の売り場面積を誇りながらも美術コーナーは縮小されてしまい最小限とも言える品揃えに違和感を持っている。美術コーナー減少には文房具売場の拡張や地域の詳細なマーケティングに依る背景が原因にあると考えられるが、このことは美術教育にも類似したものを感じる。総合学科などでは新たに配置される場合が稀に見られるものの間口の少ない高校は芸術科目に美術を設置せず、書道や音楽を履修させる場合が多い。また義務教育でも規模の小さな小、中学校などは美術の選任を配置することなく他教科の教員が兼務で授業をしている事例が多く見られる。兼務されている先生方は研究熱心で研究会やセミナーに参加して子どもたちに積極的に関わろうと奮闘されていることとは裏腹に学習指導要領に明記された授業時数も減り児童生徒数の減少に伴う教員定数の削減により学校教育の場からも子どもたちの美術に触れる機会が削減されているのである。

美術教育は表現活動を通じて個々に異なる視点に着目し伸張させることができる。子どもたちが自ら感じたことや考えたことを形や色に置き換える過程での想像する行為はやがて創造する喜びへと昇華する。ヒトが持つ特有の能力を深化させる役割を果たすことは美術教育の最大の特徴のひとつで有効な学力であろう。残念ながらそれが意識されることは少なく世の中では主要と名のつく教科科目に目が向けられてしまう。美術で身につく力は計算力や文章力、記憶力のように数値で計ることが馴染まない。教育として分かりにくいことは人々を美術から遠ざけてしまう。

一方、いわゆるお受験のために図画工作のスキルアップの手法を紹介する幼

児のための雑誌や誰でも大人の目を引くような絵を描くことができるようになるハウツー本などが好まれているとも聞く。上手に見せることができる作品には発達に則した指導は無用となり、個性が薄まり画一化された表現は学力とは遠い存在となる。道内の高校、美術部が参加する展覧会でも評価される作品づくりを目的としているような傾向が見受けられる。今回のレポートでもこれに警鐘を鳴らしているものがあり、現場の教師が美術教育に対しての価値を大局的な眼と意識に照らし合わせる重大さを訴えている。美術教育を取り巻く状況は依然として厳しいが現実には起こっている課題から目を逸らすことなく、私たちは日々の授業実践を検証し、子どもたちの発達に寄り添い続けたい。

茶谷裕樹（美深町立仁宇布中学校）・大崎智尋（札幌白陵高校）・十河幸喜（江差高等学校）・上野秀実（釧路江南高校）